

「十字架だけが権威の証し」

マルコによる福音書 1 1 章 27 - 33 節

森島 牧人 牧師

私たちの人間関係は言葉による対話・問いと答えによって骨組みが出来上がっています。スムーズに運ばれて行く対話の片方で、激しい対立が生ずることもあります。その場合、予断、偏見、先入観、誤解など、対話の前に相手を判断してしまっていることに起因することが多いようです。それは自らの内面の反映なのですが、そうとは考えず相手の悪意によると思い込んで被害者意識に落ち込み、時には自身の内に憎しみを抱えることになったりします。今日の聖書を通し、人間のそのような在り方を捉えてみたいと思います。

今日の聖書の出来事は、非常に過激で、人間の範囲を超えたところまで問うてしまった問題ではないかと思われまふ。それは宮浄めの翌日、エルサレムの神殿の境内を歩かれていた主イエスと祭司長（サドカイ派）、律法学者（ファリサイ派）、長老（町の代表者）たちとの対話の場面で、すでに受難週に入った火曜日のことでした。彼らは議会の構成メンバーで、その権限はイスラエルの民の宗教と社会生活の指導、そしてローマ帝国の支配下での死刑以外の裁判権に及んでいました。前日の宮浄め事件で会議を開いた後、彼らは主イエスのところへやって来て「何の権威で、このようなことをしているのか。だが、そうする権威を与えたのか。」（マルコ 11：28）と詰め寄ったのです。彼らは表面的には神の栄光、秩序の保持を唱えながら、実際には多くの群衆が支持する主イエスによって自分たちの権威が損なわれることを恐れ、主を亡き者にしようと謀っていたのです。十戒によって死刑を禁じられている彼らの企ては、教育もなく、正規の任命も受けていないこの越権行為者をローマ総督ピラトに引き渡すことでした。

彼らの問いに主イエスは「では、一つ尋ねるから、それに答えなさい。そうしたら、何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。ヨハネのバプテスマは天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。答えなさい。」（同 11：29 - 30）と逆に彼らに問われます。このバプテスマのヨハネは「悔い改めよ。天の国は近づいた。」（マタイ 3 - 2）と叫び、多くの人々にバプテスマを受け、バプテスマを受けに来たファリサイ派やサドカイ派の人々には「蝮の子らよ。・・・わたしの後から来る方は、・・・」（同 3：7 - 11）と、警告と救世主の到来を知らせていたのでした。しかし彼らはそれを無視し、その後ヨハネはヘロデ王に殺されてしまったのです。そのヨハネのことを問われた彼らは困りました。群衆が預言者だと思っているヨハネを否定することは、群衆を敵に回すこととなり、ここで悔い改めをすることはプライドが許さない・・・。実にここに神の権威のみが現わされていて、自身の権威と真の神の権威とがすり替わる分岐点であったにもかかわらず——主が与えられた最後のチャンスでもありました——彼らは大切な決断を避けて「分からない」と答えたのです。主イエスはそれを受けて「それなら・・・わたしも言うまい。」（マルコ 11 - 33）と言われたのでした。この主の厳しい裁きの言葉を前に、現在私たちも神の栄光と言いながら、実は自分の権威・権限を守っているのではないかと不安になります。このことについて主は「あなた方の中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり・・・すべての人の僕になりなさい。」（同 10 - 43）とされています。

主は、私たち人間の僕になることによって真の権威を示されました。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者となりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」（フィリピ 2：6 - 8）とパウロが語る通り、不思議にも最低の所から仕えてくださることに於いて明らかにされた真の権威、これこそがイエス・キリストの出来事、すなわち十字架の道ということでありましょう。パウロは「このため、神はキリストを高く上げ・・・」（同 2 - 9）と続けています。

主イエスは、聖霊によって今も私たちを訪ね、私たちの心の扉を開けてくださっています。そして主は「あなた自身を、あなたの権威を真の権威を持つ方に明け渡しなさい。それがあなたの真の道であるのだから。」と語ってくださっているのです。

（説教要約 羽入田悦子）